

フィンランドからサンタクロースも 3 年ぶりの来日、“てまえどり”などの流行語を生んだ 2022 年、新たな景色が見え始めています。日本の高専はそのしくみができて今年で 60 年、高専は ESG を標榜する企業へのファストトラック、今必要な高専といわれます。中学校卒業後の 15 歳のそれぞれの思いと志をもった学生を受け入れ、実験実習を中心とした 5 年一貫の実践的技術者教育を行うとされ、入学後は生徒ではなく学生となります。大学や短大とならぶ高等教育機関と位置付けられ、中核的技術者、エンジニアの育成を行う目的として制度が創られ、近年では、研究・開発に従事する技術者としての活躍も期待されています。全国的には、6 割の学生が就職、4 割が進学、その 6 割が大学に編入し、4 割が専攻科に進学しています。前職の大学でも、商船高専や工業高専の本科あるいは専攻科から進学してきた学生のみなさんが研究室で素晴らしいリーダーシップを発揮していたことは、強く印象として残っています。協働して大活躍をしてくれました。そのリーダーシップと協働、第 57 回を迎えた海学祭も学生会・海学祭実行委員はじめ多くの人の協働によって、今年のテーマは桜梅桃李（おうばいとうり、cherry-plum-peach-apricot）でした。他人と自分を比べることなく個性を磨き自分らしく生きる。同時にお互いの個性を認め、学びあい、他人の意見に耳を傾ける。学校はまさにそういう場なのです。学生たちもそれぞれに充実感、達成感をもって新たに自分を見つめなおすことができたと思います。生活にも一層のほりがでて日常の生活も新鮮なものとなるでしょう。別の場所で書きましたが、VUCA の時代ともいわれています。VUCA（ブーカ）とは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取った言葉で、変動し、取り巻く環境が複雑性を増し、想定外の事象が起り得る将来予測が困難な状態という意味とあります。そのような時だからこそ、学校は生き抜くための大切なものを磨き、身に付ける、5 年または 5 年半、惰性に流されず、時には原点に戻って自分を見つめなおす、そうすれば日常も変わるものです。

本校の尖った 2 学科で学んだ先にあるもの、海運業界は、GHG 排出削減に向けた代替燃料への転換などの環境問題、自律運航船や洋上風力発電などへの事業展開など急速な技術革新とともに変貌しています。活躍する舞台、求められる能力も船上のみならず、先進技術の展開や海運にかかるスキルを活かしたマネジメント力まで期待が寄せられています。

一方で社会全体において、デジタル化に対応したイノベーション人材の育成をふまえて、グリーンなどの成長分野への産学官の連携強化や起業、新規創業（スタートアップ）を支える人材の育成確保が求められています。情報と電子機械・制御技術全体を俯瞰、システムを操る領域横断型の技術者、エンジニアが求められます。根底にあるものは物理であり、数学であり、化学であり、高専で固める基礎学理、基礎工学にほかなりません。国語と英語のスキルは歴史や文化への理解とともに必須です。理系だから、文系だから〇〇は不得意は昔の話です。すべて身に付けておかなければなりません。

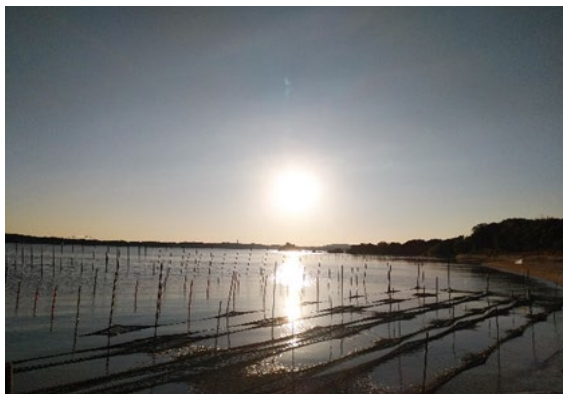
脱炭素・DX に対応した産業の競争力強化、ゼロエミッションとカーボンニュートラルへの挑戦、エネルギー問題を抱える我が国は、再生可能エネルギーの利用、資源調査に必要な海のドローン、水中ロボットの持続的開発が求められ、本校卒業生の活躍する舞台は海に陸に大きく拓かれています。地域課題を解決する PBL（Project Based Learning）、学年通貫で 1 年生から取り組み、地域産業や文化を理解し工学的な解決法を提案できる実践的技術者を目指します。地域や社会と一体となったコミュニティ型の教育としてデジタル田園都市国家構想（本年 6 月閣議決定）につながる活動です。学生の益々の活躍にご期待ください。

本校、2022年は5年ごとのキャンパスマスタープランの検討の年であり、教職員はじめ校内外のご協力を得て、防減災・備災を踏まえたキャンパスプラン、練習船と栈橋の整備、寮地区はじめキャンパス整備を検討しています。

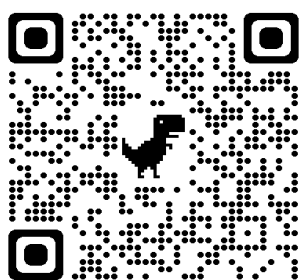
次号では、高専の学生時代に培ってほしい海外とのふれあいについて述べたいと思っています。引き続き本校の学生・教職員一体となった諸活動への温かい応援をお願い致します。



神島にて



志摩点景



高等専門学校制度創設60周年記念式典/記念シンポジウム